

船大工 天満

〔和漢船用集五〕御座船○中海御座、河御座其法攝州天満堂島に専盛なりとす、故に

寺島良安、天満の船大工、攝州の土産にのせられたり、是關舟川舟をつくりなせる、其功自然とあ

らばる、者なるべし、則天満舟大工町、堂島船大工町と言て、七十年前までは、濱邊にて七十丁

八十挺立の大船をつくりし所なりしに、貞享元祿の比、川村瑞賢、天下の釣命によつて新川をほ

り、堂島に新地拾町の町家を開けり、是に依て以前大船を造りし所も今町中となり、川幅もせま

くなりて橋數多掛れり、其下の洲崎を下し賜て、今船作り場とす、是も町役御赦免有なれば、年經

て兩船大工町の如く名のみこのりて、船大工絶へなんことをなげけり、

〔江戸鹿子一〕三途渡 淺草萱町より向へ渡る所なり、○中吉原へ通、二丁立の早船おほし、茲にて

五郎兵衛といふ船大工、早船を造なり、二丁立の船頭は、此五郎兵衛船ならでは用ひぬとて、褒美

する也、

〔江戸鹿子五〕舟作 井穴藏 大工

南八丁堀 小網町 うなぎ堀 銀町土手

〔和漢船用集一〕浪華金澤氏、家世舟匠、傳其規矩亦多矣、至兼光、更博探旁求、作爲是書、○中

寶曆辛巳仲冬

岡白駒

〔日本書紀一〕伊弉諾尊、伊弉冊尊、○中生蛭兒、雖已三歲、脚猶不立、故載之於天磐櫂樟船、而順風放

棄、

〔釋日本紀五〕私記曰、問此船者、其實何物哉、答、其以櫂樟木爲船耳、今殊云磐者、堅磐之義也、但至

于饒速日神、只曰磐船、未詳其同異也、

〔日本書紀一〕一書曰、日月既生、○中次生鳥磐櫂樟船、輒以此船載蛭兒、順流放棄、

種類
以原實爲名